様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２４５８

研究課題名（和文）１９世紀英文学とジャーナリズムに見る〈新しい男〉像の生成と文化的・歴史的意義

研究課題名（英文）The Appearance of the New Man and His Cultural and Historical Significance in Nineteenth-Century English Literature and Journalism

研究代表者
田中　孝信（TANAKA, Takanobu）

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：２０１７１７７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀末に〈新しい女〉の出現に誘発されて登場した〈新しい男〉は、彼女の社会的・政治的解放の試みを支持し助ける賛同者と位置づけられる。そして彼女のロマンティックな恋人でもある。こうした男性像の原型は、19世紀半ばの文学作品に見出すことができる。しかし世紀末小説には、〈新しい男〉を目指した男性が因習的な家父長制志向との間で葛藤する様も描き出される。それは理想像かもしれないが、女性の解放のみならず、イデオロギーとしての「男性性」に縛られた男性自身の解放をももたらすのである。さらに〈新しい男〉は、同性愛的友情によって階級的・人種的他者との間に民主的で平等な絆を築き得る可能性も帯びているのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の特色としては、国内外の英文学・英国文化研究ではほとんど顧みられることのなかった〈新しい男〉の生成過程と社会的反応を、文学とジャーナリズムとの関わりの中で、19世紀全体を俯瞰して捉え論じた点、及び〈新しい男〉を〈新しい女〉や反フェミニズムの女性だけでなく、階級的他者や人種的他者との関係からも捉えた点が挙げられる。結果として浮かび上がってきた〈新しい男〉の複層性は、西洋の影響を受けた明治期日本において文学やメディアが作り出す〈新しい男〉像への関心をも喚起する。それは現代の若者像に目を向けることにもつながり、地球規模で様々な境界が曖昧化する社会において、境界の持つ意味を再考する契機となる。

研究成果の概要（英文）：The radical New Man appeared with the emergence of the feminist New Woman at the fin de siecle. He is best understood as a political ally to her, supporting and aiding her attempts at social and political liberation; yet he is also her romantic partner. While his archtype can be found in mid-century fiction, the fin-de-siecle fiction describes his conflicting emotions between maintaining the position of the New Man and retreating to an adherent of the conventional patriarchy. Though he may be merely an ideal figure, it is true that the New Man contributed to the emancipation not only of women but also of men themselves, who were bound by the then ideological masculinity. Furthermore, the New Man assumes the potential possibilities of constructing democratic and equal relationships with class-based and racial others through "friendship-love," a word connoting homoerotic feelings.

研究分野：人文学

キーワード：19世紀英文学　ジャーナリズム　新しい男　新しい女　セクシュアリティ　ジェンダー　セツルメント　帝国

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　19 世紀末の英文学には、中流階級を中心に、良妻賢母型の〈家庭の天使〉に代わって〈新しい女〉が登場する。彼女たちはジェンダーの境界を侵犯し、政治的意識に目覚め、男性と平等の教育や雇用の権利を訴えるのである。こうした女性像をフェミニズム批評は積極的に取り上げ、彼女たちを生み出した文化的・社会的背景や彼女たちの「新しさ」や「女」に関する新しい認識を分析してきた。

(2)　その一方で〈新しい男〉に関しては、当時からその実体について十分な注意が向けられることなく、今日に至るまで系統だった研究がほとんどなされてこなかった。原因の一つとして、彼が、主として女性作家によって書かれた〈新しい女〉小説に登場するため、単に〈新しい女〉の補完物と見なされる傾向が強かったということが考えられる。もっとも個別の作家研究では、例えばマーガレット・マークウィック『トロロプ小説における〈新しい男〉』（2007）のように、家庭的な父親像としての〈新しい男〉の登場を論じた興味深い書が出たが、19 世紀全体を視野に収めたものではない。その点でタラ・マクドナルド『ヴィクトリア小説における〈新しい男〉、男性性、結婚』（2015）は、〈新しい男〉を 19 世紀中期から俯瞰的に捉えたもので画期的と言える。しかし、議論が男女間の枠組みに留まっており、また分析対象も文学作品に限られている。したがって、文化史的研究としての成果は限定的と言わざるを得ない。

(3)　このように〈新しい男〉研究が不十分な状況下では、私たちはまず、彼の誕生に至る経緯を 19 世紀前半からの「男らしさ」を概観することで押さえておく必要がある。摂政期のダンディ像、19 世紀中期の福音主義に基づく道徳的紳士像、そして筋肉的キリスト教の流れを汲む、帝国主義の高揚と共に唱道される「マッチスモ」。特に、〈新しい男〉を考える際に道徳的紳士像との関係を見逃してはならない。ディケンズの『デイヴィッド・コパーフィールド』（1849-50）のトラドルズや『大いなる遺産』（1860-61）のハーバートなどには道徳的紳士像が体現されている。こうした多様化する「男らしさ」の変遷を跡づけ、〈新しい男〉との関係を探ることで、〈新しい男〉の異性との共感と協力に基づく関係の成り立ちとそれに対する社会の反応への洞察が深まるのである。

(4)　〈新しい男〉は何もジェンダー面からのみ捉えられるべきものではない。その点が本研究課題の特色の一つである。そもそも〈新しい男〉に注目する契機となったのは、「19 世紀英文学とジャーナリズムに見られるイーストエンド像の歴史的・文化的研究」〔平成 25 年～27 年度科学研究費（基盤研究（C））の研究成果の一環として発表した「博愛か偽善か？—19 世紀ロンドンの貧しい子どもたちの表象」（『人文研究』、2015）だった。スラムで慈善活動に勤しむ中流・上流階級女性に関しては多くの先行研究があり、彼女たちの男性中心イデオロギーからの解放願望と、階級を超えた、労働者階級女性との姉妹関係の構築は容易に読み取れる。それに対して、男性の慈善活動家関連の研究はほとんどなされていない。しかし、トインビー・ホールやオックスフォード・ハウスにおいて、セツルメント活動を担ったのは男子大学生や聖職者だったのである。彼らは、公共心のある、貧しい人々に深い共感を覚え絆を希求する、新しい「男らしさ」を帯びた男性たちだったのだ。〈新しい男〉というのは、単に〈新しい女〉と対になって考えられる存在ではなく、階級的他者に対しても、さらに、帝国での布教活動に見られるように人種的他者に対しても、境界を越えた関係を築き得る者たちなのである。それは一つの文化現象であり、愛国主義で高揚する中、皮肉にも時代が求めた「男らしさ」ではなかったのか。そして、その内面はいかなる複層性・矛盾を帯びているのか、という問題意識を持つに至ったのである。

２．研究の目的

(1)　本研究は、研究代表者が上述の「イーストエンド像の歴史的・文化的研究」で実施してきた研究の一部を活用し、〈新しい男〉それ自体に焦点を当てる。したがって、第一に重要な目的は、〈新しい男〉の表象を文学のみならず新聞・雑誌にも求めることである。ジャーナリズムは、民意を反映すると同時に民意を煽情的に誘導する。それが文学との競合・協力の中、周縁的存在である〈新しい男〉をどのように表象し、読者にどのような影響を与えたのかを明らかにする。

(2)　次に本研究で重要となるのが、〈新しい男〉が〈新しい女〉に対して示した共感、彼の貧民救済活動や帝国での伝道活動、そういったものの背後に潜む「政治的無意識」や欲求を探ることである。〈新しい女〉が〈新しい男〉という賛同者を得ることは、従来の男性中心イデオロギーを揺るがす契機となるが、同時にそれはロマンスのプロットを持ち込み、女性の自立を妨げる危険性を孕む。だが〈新しい男〉にしたところで、志を同じくする同性の仲間を見つけることができたのか、さらに深刻なことに、既成のイデオロギーから本当に脱け出せたのだろうか。貧者や有色人種に接するとき、〈新しい男〉に劣等と見なす者への優越感や性的欲求はなかったのだろうか。〈新しい女〉同士の連帯や彼女たちの慈善活動等との比較を通して、境界の流動化とその限界が見えてくる可能性がある。

(3)　このように〈新しい男〉を社会的事象として眺め、ジェンダー面のみならず階級・人種の観点からも捉えることで、彼の全体像を明らかにする。そして、20 世紀の、とりわけ、初期モダニズムの男性像や 1980 年代・90 年代に『アリーナ』のような男性向けライフスタイル誌と共に現れた〈新しい男〉像との比較検討を加えることで、世紀末の〈新しい男〉の独自性を詳らかにし、20 世紀の男性像との関連性を探る。

３．研究の方法

(1)　19 世紀イギリスの文学とジャーナリズムの相関関係の中で〈新しい男〉像を歴史的・文化的観点から考察するという研究目的達成のために、研究代表者は、本研究に関わる過去の業績である学術論文・図書を始めとし、前述の科学研究費による研究成果を踏まえ、発展的内容となるように努めた。

(2)　研究対象範囲を、1811 年の摂政期から自由主義の黄金時代を経て帝国主義時代の到来前夜の 1860 年代と、1870 年代の帝国主義時代から 1914 年の第一次世界大戦に至る時期、の二つの時期に分けることにした。

(3)　文学と新聞・雑誌における〈新しい男〉の表象を、彼に対するそれらの言説の共通性と相違性に着目しながら探る一種の文化史研究なので、資料収集と資料分析という二つの作業が中心となった。

(4)　大枠としては、まず 19 世紀全体の「男らしさ」の規範の変遷を文学と新聞・雑誌に追い、それらに対する、虚構と現実を問わず、女性はもちろん男性自身の反応を探り、世紀末における〈新しい男〉誕生の背景を押さえた。その上で、〈新しい男〉が、〈新しい女〉、セツルメント活動、国内外での宗教活動等との関連で、新聞・雑誌や文学作品の中でどのように表現されているかを精査して比較検討した。そうすることで、〈新しい男〉誕生の必然性や彼が帯びる曖昧性に迫り、その本質と社会的意義や 20 世紀への影響力を明らかにしようとした。

(5)　研究実施のため、対象となる文学作品は概ね附属図書館に整備されていたが、新聞・雑誌資料については、前述の科学研究費の助成による収集品を活用しつつ、新たな資料の追加や現地調査・収集を行った。第一段階として、初年度は新聞・雑誌の基礎的資料の充実を図り、『19 世紀』、『グラフィック』（追加分）等を購入し、資料のデータ・ベース化を設計した。第二段階では、大英図書館において『スピーカー』、『ウェストミンスター・ガゼット』など数誌を、トインビー・ホールにおいて『トインビー・レコード』を閲覧した。そして最終段階として、それらから得たデータを用いて研究の取りまとめを行った。

４．研究成果

(1)　まず〈新しい男〉像を明確にした。従来、家父長制社会は支配の手段として、また皮肉にも、フェミニスト研究者たちは家父長制に立ち向かうために、男性性を一元的に捉える傾向にあった。しかし今日のヴィクトリア朝男性性研究は、男性性を単一のものではなく変化と多様性に富んだものとして提示している。〈新しい女〉の出現に誘発されて登場してきた〈新しい男〉も、そうした多様な男性像の一つである。このとき男性性の概念に変化が生じる。〈新しい男〉というのは、〈新しい女〉の社会的・政治的解放の試みを支持し助ける、彼女の賛同者と理解すればよい。そして、世紀末小説の中では、彼女のロマンティックな恋人でもある。こうした男性像が多くの〈新しい女〉作家たちによって理想と見なされたのだ。彼の登場は、伝統的な結婚のプロットへの挑戦と言えるのである。

(2)　〈新しい男〉はセクシュアリティの点からも重要である。なぜなら、〈新しい女〉は従来の男性の性的乱交を批判し禁欲を求めるからである。〈新しい女〉と言えば、結婚に対する彼女たちの批判的な見解から判断して、結婚を否定し、自らの主張に賛同する男性との「自由な結びつき」を進んで求める者と一般に考えられている。だが実際のところは、多くの〈新しい女〉たちは、女性の解放イコール性的解放と単純に見なすのではなく、夫が婚外性交を慎み、妻を対等に、そして尊敬の念をもって扱うことを求めるのである。セアラ・グランドは、世紀末に流布していたイギリス人の退化言説を背景に、退化の原因が男性の道徳心の欠如に存するとまで指摘している。

(3)　〈新しい女〉作家たちは男性に規律を要求したわけだが、これはヴィクトリア朝中期の福音主義の流れを汲むものと判断できる。当時、中流階級男性は、性的エネルギーの自然な発露を制御するように期待される一方で、結婚前に性的体験を積むことが奨励された。福音主義者たちは、この性的体験を多く積むことこそが男らしいとする風潮を断ち切ろうとしたのである。そして、その代わりに「性格」こそが若い男性の間での貴重な規範として機能することを目指したのである。ディケンズは、道徳的性格と性的節制を『デイヴィッド・コパーフィールド』中のトラドルズ像に誇張した形で体現させている。彼は主人公デイヴィッドの人生の節目に影響を及ぼす重要な役割を担い、結婚後は妻と共に「公私の調和のとれた結合」を実現する。『大

いなる遺産』のハーバートは、このトラドルズの改訂版と言える。ハーバートでより強調されるのは、主人公ピップに対する看護に見られるような男性の優しさであり、それが資本主義的競争に代わり得るものとして提示されるのだ。

(4)　要するに、〈新しい男〉を遡れば、19 世紀半ばのディケンズやジョージ・エリオットの作品に登場する、標準的な男性性の枠から外れた要素を有する人物に行き当たる。彼らは感受性に富み、養育に携わる家庭的な男性であり、妻との間に、全く平等とはいかないまでも、後の〈新しい男〉と〈新しい女〉の間に見られるような協力関係を予期させる形で、友情と知的交流に価値を置く関係を構築しているのだ。その背景には、1830 年代から 60 年代の比較的平和な時期にあって、中流階級の男性は、男同士の絆や英雄的行為・冒険といった伝統的な男性性よりむしろ、金銭関係に支配された社会での疎外感や非人間的な関係を癒してくれる、愛と秩序から成る、男性性と女性性の相互補完的な家庭空間を尊んだという事実がある。

(5)　〈新しい男〉が〈新しい女〉小説というフェミニストの言説に含まれると、ロマンスのプロットを構築し、ヒロインの独立願望を妨げる危険が生じることは否定できない。ヒロインの内面に葛藤が生じるのである。だが〈新しい男〉にとっても、幸福への道のりは厳しい。〈新しい女〉が〈新しい男〉とのロマンスを選ぶか、専門職への道を選ぶかを決めなければならないのに対して、〈新しい男〉は、パートナーとしてどんな種類の女性を選ぶか、言い換えれば、〈新しい男〉の立場を保持するのか、それとも、より保守的で規範に則った陳腐な姿勢に後退するのか、という葛藤に追い込まれるのである。ディケンズのハッピー・エンディングを良しとしないギッシングは、『余計者の女たち』（1893）や『渦』（1897）の中で〈新しい男〉を目指した男性たちの葛藤をリアリスティックに描き出す。それは、同時期の多くの〈新しい女〉小説家たちが、〈新しい女〉の人間的成長を中心に展開する物語の単なる脇役として男性を用いたのとは大いに異なる。ギッシングの作品は、二つのベクトルに引き裂かれた世紀末の男性の内面を際立たせて描写するのである。〈新しい男〉らしさ獲得の実験は、結局のところ失敗する。だが、そうした不満足な結末を描くことでギッシングは、社会の変貌に尻込みしつつも、抑圧的なまでの性役割や結婚制度を間接的に批判し、〈新しい男〉登場の必要性を唱えているのである。

(6)　規律、厳格さ、そして女性嫌悪と結びついたヴィクトリア朝人が〈新しい男〉を創造したというのは、ヴィクトリア朝の男性性やジェンダー関係に関する私たちの理解の幅を広げる。結婚のプロットを伴う小説中に〈新しい男〉が登場するほどに結婚制度が硬直し、世紀末の遥か以前から厄介な問題を孕んでいたことの表れであると考えられる。〈新しい男〉はあくまで理想の人物像であり、〈新しい女〉との理想郷を完全には実現できないかもしれない。だが、ディケンズやギッシングも新しい男女の結びつきを模索していたのは事実だ。そしてそれは、男性はかくあるべしという、イデオロギーとしての「男性性」に縛られ、心身ともに疲弊した男性自身の解放をももたらすのである。

(7)　では、〈新しい男〉を世間はどう見ていたのだろうか。1894 年から 95 年にかけて、『パンチ』誌や『スピーカー』誌には、彼を雄々しく恐ろしい〈新しい女〉の、身体的に虚弱で女々しく滑稽なパートナーとして皮肉る記事や挿絵が数多く掲載された。たとえば「〈新しい女〉は〈新しい男〉を作る！」と題された 1895 年 7 月 27 日の『パンチ』の挿絵では、画家は、〈新しい女〉の男性的な性質に読者の注意を向ける一方で、いかに男の連れがめかし屋、ダンディであるかを強調し、両者を共に批判するのだ。実際、世紀末の新聞・雑誌では、ダンディと〈新しい女〉はしばしば結びつけられ、ジェンダーの境界を揺るがす人物たちとして、蔑みと恐怖の眼差しで見られたのだった。

(8)　「〈新しい男〉はおおむね〈新しい女〉によって形作られた」のみならず、階級の壁を越えた、男性同士の関係の中にも見出せる。具体的には、世紀末ロンドンのスラムにおけるトインビー・ホールやオックスフォード・ハウスを拠点とした中流・上流階級の男子大学生や聖職者による貧民や労働者階級の子供に対するセツルメント活動である。審美主義や禁欲主義を信奉する彼らは従来の男性像から逸脱する存在であり、世紀末に表面化した同性愛と結びつけられる可能性を常に帯びる。実際「ギリシア的愛」を声高に擁護するアシュビーやシモンズは、スラムでの慈善活動に惹きつけられた。E・M・フォースターは『モーリス』（1913-14 執筆、1972 年出版）の中で、恋人だったクライヴが女性と結婚したことに衝撃を受けたモーリスが、慈善活動での「粗暴な少年たち」との交流を通して、同性愛的欲求を昇華する場面を描き出す。もちろん、この意味での〈新しい男〉が皆同性愛者だったというわけではない。多くの男性のセツルメント活動家は、女性の活動家とは違って、最終的には結婚し、若い時に抱いた他の男性への愛情と大人になってからの異性愛感情とを釣り合わせる。要するに、「同性愛」というのも、博愛的「審美主義」や「禁欲主義」同様、世紀末における男性性の一側面であり、男性性の一元性から多元性への推移を裏づけるものなのである。様々な解釈を許容する〈新しい男〉という概念は、まさにそうした変化を象徴するものだと言える。

(9)　フォースターの描く〈新しい男〉の階級の壁を越えた男同士の同性愛的友情は、国境を越

えた民主的かつ平等な関係を実現する絆ともなる可能性を帯びている。その意味で、後の『インドへの道』（1924）の重要な前触れとして『天使も踏むを恐れるところ』（1905）は注目に値する。彼の、ローレン・M・E・グッドラッドが『ヴィクトリア朝の地政学的美学―リアリズム、主権、国境を越えた体験』（2015）の中で「クィアな国際主義」と呼ぶ思想は、当時の新リベラル派 J・A・ホブソンが提唱する「人類の公平で普遍的な基準」を広める「国際主義」のような思想とは一線を画しており、そこには相手を支配しようとする意図はない。フォースターの小説は、他者の視点から物事を見ることの不可能性を認識することから始まる「道徳的謙遜」を肯定する。このような彼の謙虚な思想に、今日の世界の分断を乗り越える可能性が見出せるのである。

(10)　研究代表者は研究成果を大阪市立大学英文学会や日本ヴィクトリア朝文化研究学会等で発表し、また雑誌論文や図書の形で出版した。今後はそれらの成果を踏まえて単行本として出版する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）
田中孝信、ウォルター・ベザントの『あらゆる種類と階級の人々』における文化的慈善活動と語りの戦略、*QUERIES*、査読有、第 50 号、2017、1-17

〔学会発表〕（計３件）
① 田中孝信、チャイナタウンを物語る—「オリエントなロンドン」の誘惑、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、2018
② 田中孝信、『ジェイゴーの子ども』と「よそ者」アーサー・モリソン、大阪市立大学英文学会、2017
③ 田中孝信、トマス・バーク『ライムハウスの夜』—中国人移民と異人種混淆、日本英文学会中国四国支部、2016

〔図書〕（計４件）
① 田中孝信、大阪教育図書、ディケンズとギッシング—底流をなすものと似て非なるもの、2018、123-138
② 田中孝信・要田圭治・原田範行（編著）、彩流社、セクシュアリティとヴィクトリア朝文化、2017、412
③ 田中孝信、彩流社、セクシュアリティとヴィクトリア朝文化、2017、9-46
④ 田中孝信、彩流社、セクシュアリティとヴィクトリア朝文化、2017、293-336

６．研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。